真説・恋姫†無双　～その男荀攸につき～

ハチ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
真説・恋姫†無双　～その男荀攸につき～

【Ｎコード】
Ｎ２３５２Ｙ

【作者名】
ハチ

【あらすじ】
この物語は愛が一割、シリアス一割、残り全てはお笑いで出来ております。
主人公の名は『荀攸』彼の目指す先には何が待っているのだろうか？

第一話　別離（前書き）

よろしくお願いします。

第一話　別離

「まだ走れるか？」

「はぁ、はぁ…」

一組の少年と少女が森の中を走っていた。その二人から少し離れたところからは複数人の男性の声が聞こえてくる。
少年は、徐々に近づいてくる声を気にしながら、いまだ息を整えることのできない少女に視線を移し、このままでは二人とも男たちに捕まってしまうだろうと考える。

「私…、置いて、逃げ…、て…」

どうにかして二人とも助かる方法を考えていた少年だったが、不意に少女がそんなことを言い出した。だが、少年はいつかは少女がそう言い出すだろうと考えていたし、勿論そんなことをしようとも思わなかった。
逆に、少女のその一言で決意を固めた。

「いいか？　今から俺があいつらを足止めするからお前は逃げるんだ。絶対にお前が親父たちのところに行くまでは足止めしてみせるから、振り返らず何も考えないで走っていけ」

「そっ「いいから！　俺の言うことをきいてくれ！」出来ない…、一人だけで逃げるなんて…、出来ない！」

少女は自分だけ逃げるなんてことは出来ないと、少年の服の端をつかみ離そうとしなかった。だが、徐々に聞こえてくる声は大きくな

っており、このままでは二人とも捕まり人買いにでも売られてしまうだろう。

「桂花、頼むよ…。俺はお前が酷い目にあうのなんて嫌なんだよ…」

「嫌…、桂が残るなら私も残る！」

「桂花…」

少女の言葉に少年は喜びで胸が詰まりそうになる。だが、今は喜んでいる場合ではなく声は一段と近くまで近づいてきていた。

「桂花…」

少年はやさしく少女の名前を呼び、その唇に自分の唇を重ねる。突然のことに少女は最初何が起こったのか理解できなかったようだが、すぐに自分が何をされたのか気がつき顔を真っ赤にした。

「好きだよ桂花…、愛してる。俺も後から絶対に追いつくから、俺が足止めしている間に街まで走れるな？」

「…、約束、約束だからね！　破ったら…、嫌いになるんだから！」

「ああ、絶対だ！　いけ！」

少年に背を押され、少女は涙を流しながら走りだした。少女が走りだしたのを確認した少年は、少女のために少しでも男たちを足止めするために行動を開始する。

二人を追っているのはこの辺を根城にしている賊であり、少なく見積もっても十人以上が自分たちを追ってきていた。

最初、馬に乗っている者もいたが馬が入れないようもありに逃げ込んだお陰で今現在追ってきている者は馬には乗っていなかった。

「絶対に桂花には手を出させない…」

少年はそう呟くと最近使えるようになった気を体全体に巡らせ身体強化をする。少年が気を使えるようになってから日も浅く、使った後は必ずといっていいほど気を失ってしまうのだった。
さらに、気で身体能力を上げたからといって、まだ十になったばかりの少年が大の男五人以上を相手にして勝てるとも思えなかった。だが少なくとも何人かは倒すことが出来、その分だけ少女が逃げる時間を稼ぐことが出来るだろうことは間違いなかった。

「こっちだ、餓鬼がいやがったぞ！」

そして、賊が少年に追いついてきた。賊は少年が逃げるのをあきらめたと思い込み、厭らしい笑いを浮かべながらゆっくりと少年に近づき…。

「手間かけさせやっ！？」

次の瞬間に、数メートル後ろに殴り飛ばされていた。突然のことに対応出来ていない賊に少年はさらに追い討ちをかけ、地面に尻餅をついている賊の顔面めがけ全力で蹴りを食らわせ、その一撃を食らった賊はさらに数メートル吹き飛ばされ、少しの間痙攣していたがすぐにそのまま動かなくなった。

「お頭！　一人餓鬼にやられましたぜ！」

そして遅れてやってきたほかの賊が仲間がやられたことを、自分た

ちのリーダーに伝える。

「餓鬼だと思って油断しやがったな、阿呆が。それにしても、餓鬼の癖にやるじゃねーか。だが、大人しくつかまっとけば、痛い目を見ないですんだものを…。手前ら、手足は折ってもかまわねぇ、顔とあそこさえ無事ならこれだけの上玉だ、男でも高い値がつくからな」

「「「へい！」」」

その男の命令に従い、三人の男たちが少年を捕まえようと三方向から徐々に近づき、それにあわせて少年はじりじりと後ろに下がっていく。

「どうした？　怖くなったのか？」

「…」

「へっ、怖くなって声もでねぇ！」

賊が何か言うのを最後まで聞かず、少年はいきなり後ろに向かって走り出し、それを追うようにして三人の賊が走り出した。

だが、少年は一本の木の幹を蹴ると、そのままバク転の要領で三人の後ろに回りこみ、真ん中にいる一人を右側にいる賊に向かって蹴り飛ばし、すぐさま残りの一人の足を払いその場に転倒させ、また走り出した。

「何もたもたしてやがる！　追うぞ！」

お頭の声に三人は慌てて起き上がると、お頭と一緒に少年の後を追

いかけるのだった。
それから三十分が経過したころ、少年は崖の端にまで追い詰められていた。さらには気の使いすぎにより立っているのもやっとの状態であり、これ以上は逃げられそうにもなかった。

「手間かけさせやがって…、少しばかり教育が必要なようだな。大人をおちょくるとどうなるか…、しっかりと体に覚えさせてやるぜ」

そういってお頭がゆっくりと近づいてくる。だが、少年にとってはこの後自分がどうなるとそんなことはどうでもよかった。これだけ時間を稼げたのだから。

お頭は少年に近づくと髪をつかんで下を向いている少年を顔を上げさせ、少年の目に映った男の顔には厭らしい笑みが浮かんでいるのだった。

「安心しな、一緒にいた女もあとで必ず捕まえてやる」

その言葉を聞き少年は男の顔を睨み付ける。

「ほう、まだそんな顔が出来るのか？　そうだな、なんならお前の前であの女を犯してやろうか？」

「…」

「なんだ？　声が小さくて聞こえねぇぞ？」

「あんた、には…、むりだよ」

少年の言葉を聴いてお頭は怪訝そうな顔をするが、次の瞬間少年が

どこにそんな力が残っていたのかというほどの力を出し、お頭の腰に手を回し走り出していた。

「あんたは俺と一緒にここから落ちるんだからな！」

「てめぇ！」

御頭は少年の手を振りほどこうとしたが、予想以上の力でしがみ付かれている為に振りほどくことが出来ず、慌てて腰から担当を抜くと少年の顔目掛け斬りつけた。

「！！」

かけていた眼鏡をはじかれ、さらには顔を切られた少年はそれでもしがみついている手を離さず、そのままの勢いのまま崖へと飛び出していくのだった。

崖から落ちながら少年は安堵していた。少女を守れたこと、少年にとってそれをなし得れたことが何よりもうれしかった。

だが、たった一つだけ気がかりなことがあった。それは少女との約束を破ったことである。

「ははっ…、桂花に、嫌われ、るな…」

それだけを呟いた後少年は意識を失い、そのまま下を流れる川へと身を落とすのであった。

数十分後、少女は街から兵隊を連れて森へと戻ってきていた。だが、

そこにはぞ一人の賊の死体と、少し離れた崖に少量の血痕、それと眼鏡だけが残されていた。

「嘘つき…、絶対戻ってくるって言ったじゃない…。嘘、ついたら…、嫌いになるって言ったじゃない…」

少女は少年尾の眼鏡を胸に抱き涙を流す。少年の家族や少女の家族、さらには兵たちも少年を探していたが生存確認はおろか、遺体すらも発見できていなかった。

「嫌いに、なってやるんだから…！　あたしとの約束を破る桂なんて…、大嫌いなんだから！　あたしのこと好きって言ったのに、愛してるって言ったじゃない！」

少女の慟哭は、彼女の両親が来るまで終わることはなかった。

少年の名は荀攸公達　真名を桂と言う。
少女の名は荀？文若　真名を桂花と言う。
二人は同じ場所、同じ日、同じ時間に生をうけ、常に一緒に行動していた。母親同士が中がよいこともあり本当の家族のように育ってきた。
幼くして、才能を開花さた二人を周囲は神童と呼び、二人はそれ以上に努力をしてきた。二人は同じ時間を過ごし、同じ歴史を歩むものだと周囲も、本人たちもそう思っていた。このときまでは…。

少女と少年の時間は引き裂かれ、少年はいずこかへと消えてしまい、少年と少女が再びその時を共有するまでには数年の時を必要とするのだった。

時は後漢末期、世は徐々に乱れを見せ始め、時代は英雄を求めよう

としていた。正しき道を外れた歴史は、この先人々に何をみせ何をさせようとするのだろうか？

第一話　別離（後書き）

いかがでしたでしょうか？

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2352y/

真説・恋姫†無双　～その男荀攸につき～

2011年11月5日04時09分発行